

## はじめに

あなたは、一日あたり何回くらいものごとを判断しているだろうか。

ケンブリッジ大学のバーバラ・サハキアン教授の研究によると、人間は一日に約三万五〇〇〇回もの意思決定を行うとされている。

意思決定には、基本的に「問い」が伴う。何かを選択するということは、複数の道のどれを採るか、あるいは道なき道で何を答えとみなすかを自他に問い、選び取っていく営みだからだ。

世界は、問いであふれている。

朝起きれば「今日は何をするんだっけ？」と自分に確認し、仕事の最中には同僚に「あの件の進捗どう？」と聞き、食事のひとつにさえ膨大な選択肢がある。そうした「問い」のほんの一部でも自覚的に行うことができれば、自身の欲しい成果や引き出したい情報に

少しでも近づきやすくなるはずだ。

さて、私はクイズ作家だ。クイズ作家とは、文字どおりクイズをつくる専門職のことで、テレビ番組や書籍、地域のお祭りや企業が主催するイベントでのクイズ大会、果ては商品のプロモーションまで、様々な媒体にクイズ・雑学を提供する。この仕事を二〇年近く続けた結果、自分なりに見えてきたものがある。それは、クイズ作家が問題をつくるときに使う情報の集め方や見せ方は、人とのコミュニケーションに有効であり、自身の関心や想像力を拡げるのに役立つということだ。

クイズはなにも、決まった答えを出して終わりではない。ひとつの答えに至るまでに実は様々な可能性を絞っているものであり、それを自覚的に行うことができれば、確からしい結論や面白い情報に素早くたどり着けるようになる。また、人に興味をもってもらいやすい話題選びにも役立つし、ものごとを分析する際の切り口も増える。もしかしたらこれは、クイズに関係のない場面でも活かせるのではないか。そう思ったことが、本書執筆のきっかけである。

ちなみに、この本の内容は私が個人的に得た知見であって、他のクイズ作家や業界関係者が頷くものとは限らない。そのうえで、テレビ番組の一問が成立するまでにはどんな工

程があるのか、豪華商品をかけて行うクイズイベントの陰で起こった悲喜こもごもなどを、実際の経験に基づいて書いている。たまにのたうったり喜んだりしているが、それはまあ、ご海容ください。

日々様々な場で目にするものの、どのようにつくられているのかはあまり知られていない、クイズの裏側。新しい世界の探索に、明日の話題やお仕事や発想のヒントに、ぜひ気楽にご覧いただければ幸いです。

——それでは、さっそくまいりましょう。最初の問題は、こちらです！

## クイズのレシピ

### 材料（ひとり分）

好奇心…適量    集める情報…適量    伝達の意味…多量

※好みにより、「知識」を加えてもかまいません。ただし、多用すると鼻につくため、隠し味としての使用がおすすめです。

### つくり方

- ① 調理にあたり、クイズを食べる人と、提供する場を想像します。
- ② ①に合わせ、食べる人が「へえー!」と唸<sup>うな</sup>りそうな最良の材料を集めます。
- ③ 材料を鍋に入れ、強火で煮ます。問題文が軽く煮立ったら、ミスリードになる表現や誤った情報がアクとして出てくるので、丁寧に取り除きます。
- ④ 全体がまとまり、表現がパリッとしたら、テレビなどに盛りつけて完成です。

### 栄養成分（一問あたり）

関心の広がり…三〇%

想像力の向上…二四%

会話力アップ…二〇%

知識の定着…一五%

未知を楽しむ力…一一%

※右は標準値。料理人はお客さんの好みに応じて材料を組み合わせ、成分調整を行います。

## 盛りつけ例

**問題** 経済用語で「ピーチ市場」というと、取引の場がどのような状態であることを表す？

**答え** 商品の良し悪しがわかりやすい状態

**解説** 桃は傷むとすぐに黒ずむため、買い手から商品の状態が判断しやすいのでこう呼ぶ。

**反対語**は「レモン市場」。レモンは見た目で良否が判断しづらいため。もとはアメリカの中

古車市場のスラングで粗悪品をレモンとよんだことに由来し、それが経済用語になった。

**問題** 南アフリカで子どものも感染症発生率を七〇%減らした方法。子どもが手洗いの習慣を身につけられるよう、世界保健機関が行った工夫とは？

**答え** 石鹼の中におもちゃを入れた

**解説** おもちゃが透けて見える石鹼を子どもたちにプレゼント。最初はおもちゃが欲しくて手を洗うが、大きな石鹼を使い切るころには手洗いの習慣がついているという仕組み。

## 目次

はじめに

3

クイズのレシピ

6

## 第1章

三日サボるとクイズ作問力が落ちる

13

——ふだんやっている能力アップ法

毎日、問題は多くて七〇問つくる

不得意分野を克服する

マリ・キュリーに学ぶ並行作業法

使えなくなるクイズがある

故きを温ねて新しきを生み出す——ラスボスとノミ色

手紙の文字から読み取れるもの

## 第2章

ミジンコと見つめあう

「その番組、私やってないんですけど……」

カーテンのシャーツというやつの名前

名前を知ればパフォーマンスが上がる

「知っていること」に「知らないこと」を掛ける

悩みの「ワクワクバランス」をどうするか

ウィキペディアの賢い利用法

「このビジネスクイズ、解けますか？」

ヒントは「日常」の隣にある

——クイズは入口であり出口である

クイズで想像力を育てる

日常のものに疑問を感じる——非常口のマークはなぜ緑色？

金魚がいれば銀魚もいる？——妄想を歓迎する

ビールの泡はアルコール度数が低いのか？

手締めの怪

情報を体験しに行く

知識が身体を守る——ありがとう、タンポポ

三越でドンキ?!

いいクイズはヌケがいい

「このビジネスクイズ、解けますか？」

### 第3章

クイズ作家の収入は何で決まるのか

——「誰も解けない」も「みんなが解ける」もダメ

クイズ作家になった「たまたま」の理由

就活なしの仕事

クイズ作家はクイズ王……とは限らない

「へえ!」をつくる仕事

そのクイズ、明日、人に話したくなる?

アホなふりをすることの重要性



#### 第4章

クイズ作家のお仕事1——作問

クイズ作家のお仕事2——裏取りが山場

クイズ作家のお仕事3——監修者との付き合い方

クイズ作家のお仕事4——ピンブーおよび読み合わせ

「お願い、誰か解いて！」——正解者0の恐怖

まさかの「全員正解」問題！

コメンテーターの当意即妙の凄み

事件が起きると収入の危機！

「このビジネスクイズ、解けますか？」

情報の扱い方で生き残る

——得意分野とその伸ばし方

実は「女性目線」が苦手です

忍者走りを何とよぶ？

センスは量

悩める人は「アメリカ・イアハート狙いで」

「他人の案」を通せる人が生き残る

宴会でクイズを求められたら、ことう切り抜ける

動物ネタはウケがいい

終わる仕事にはオマケをあげる

“場”を読み、出題の傾向を変える

キャッチコピーのうまい使い方

国旗の色って意外と適当?!

【このビジネスクイズ、解けますか?】

おわりに

## 第1章

三日サボるとクイズ作問力が落ちる  
——ふだんやっている能力アップ法

## 毎日、問題は多くて七〇問つくる

クイズ作家は一日何問くらいクイズをつくるのか。

周囲からよく聞かれるので、実際に数えてみたところ、私の場合、おおむね七〇問だった。

手間のかかる問題に取り組む日や、執筆など作問以外の作業が多い日は、総労働時間は変わらないが、問題数は少なめだ。同様に、内容の精査が容易な低難易度の問題は、同じ時間内にたくさんつくることができる。

日によって作問数に違いはあるが、大切にしているのは、〃休まないこと〃だ。仕事を休まないというと、「そんなストイックな!」「時間の使い方が下手なんじゃない?」と思われるそうだが、私にとって、この方法が最も効率的で気力に頼らず成果を出せるやり方なのである。

楽器を習ったことのある人なら、経験があるかもしれない。一日練習をサボると「あれ、こんなかんじだっけ?」という違和感が生まれ、三日さわらなければ指の動きが明らかにもたつく。同様のことは、作問にもいえる。一日休むと発想力が落ち、三日手を止めると

着眼点がありきたりになる。このような事情から、私は毎日問題をつくるようにしている。もうそういうものとして日々を送っているのです、いまではあまり苦ではないし、連休や日曜日など人の休んでいるときに少しでも作業をしておく、ちよつとした「私、今日も進んだな」という達成感が得られる。

もちろん、仕事においてはメリハリも大切だ。私の場合、九時～五時という定時の働き方ではなく、残業をしすぎて睨にらまれることもない。それは、裏を返せば時間と気力と体力が許せばずっと働いてしまうということだ。

うまく自分を律することができなければ際限がなくなってしまう。この危うさは、労働時間の自由度が高い職種の人に共通する課題のようだ。ライティング系の仕事の人や中小企業の経営者と話していると、「また徹夜になってしまった」「また火事場の馬鹿力を使ってしまった」という反省めいた言葉をたびたび耳にする。

## 使えるパーキンソンの法則

そんな彼らとの間でよく話題になるのが、「パーキンソンの法則」だ。

効率のよい働き方を模索したことのある人は、一度は聞いたことがあるかもしれない。

パーキンソンの法則とは、イギリスの学者シリル・パーキンソンが唱えた人の行動に関するあるあるのことで、「仕事の量は完成までに使える時間をすべて満たすまで膨張する」「支出の額は収入の額に達するまで膨張する」というものだ。

第一法則の「仕事の量は完成までに使える時間をすべて満たすまで膨張する」は、たとえば、締め切りまで一か月の仕事は本当に一か月ギリギリにならないと仕上がらない、一時間と設定した打ち合わせは本当に一時間経つまで終わらない、といったものだ。この法則から抜け出すためには、あらかじめ制限時間を短めにしておくことが有効とされている。だが、いたずらに短くすると、目標を達成できなかったり、自己嫌悪でかえって能率が上がらなくなったり、結局進行が遅れて周囲に迷惑をかけたりする。そういった事態を避けるうえで個人的に役に立った方法は、以下の二点である。

A スケジュール帳には、自分で設定した、無理のない前倒しの締め切り（短い方）だけを書く

B 時間あたりの作業量を決めて動き、完成度にこだわらず予定どおりに業務をこなす

Aについては、短い方の締め切りを正とすることで、自然とそれに合わせて動くようになる。もちろん、頭の隅では本物の締め切り（チーム内や取引先との話し合いで決めている締め切り）がちらつくわけだが、それについてはメールなどの記録を確認すればわかるので、毎日見るスケジュール帳には書かない。要は、本物の締め切りを確認するにはひと手間かかる状態にしておくのだ。こうすると、「見返すのに時間を使うより手を動かした方が早い」という気になって作業が進む。

Bについては、前段階として実験が必要だ。何をするかといえば、特定の仕事を引き受けることになってすぐ、数時間だけその案件に集中してみるのだ。すると、その仕事に關して自分が出せる速度がわかる。クイズなら一時間〇問、原稿なら一時間〇文字、といった具合だ。この「時速」をもとに、多少の余裕を上乗せして、例の「短い方の締め切り」を設定する。そして、設定後は、時速どおりに進行する。

このときポイントとなるのは、たとえ余裕がある日でも、目標値に達したらさっさと作業を止めることだ。また、不調な日でも、完成度を気にせず目標値までは進める。これにより、質はともかく一定の量は確保できるようになる。なお、経験ずみの慣れた案件ならば、実験過程を省いていきなり作業に入ることも可能である。

ところで、仕事量や時間の使い方についてなぜこんな説明をするかといえば、私自身、余裕のない綱渡りを何度も繰り返してきたからだ。おはずかしい話、締め切りを守れなかったこともあるから、この方法は「そんな奴でもなんとか成果を出せるやり方」だと思ってください。

なお、パーキンソンの第二法則「支出の額は収入の額に達するまで膨張する」は、四八ページの「名前を知ればパフォーマンスが上がる」に関係する。この法則が仕事や生活とどう絡むのか、そのページもめくってみてほしい。

## 不得意分野を克服する

中学生時代、私は英語や数学があまり得意ではなかった。どちらかというと音楽・社会・理科・美術あたりが好きで、テストの得点源として安心できるのもこれらの分野だった。

それがいまでは、クイズの世界大会の問題を英語でつくり、テレビ番組では数学を使った問題が強みのひとつになっている。人間、必要に迫られれば意外とできるようになるも



のだ。

苦手分野を克服すると、けっこう得することがある。自分が苦手なものは周囲も自信がないというケースは往々にしてあるし、たとえば好きでなくても「この人は○○分野ができる」とみなされるところまでいけば、新規案件の開拓につながりやすい。

ではどうやって学習するかというと、私の場合、まずその苦手が克服できるとどんな効果があるかを考える。一例を挙げると、クイズ作家になってからわざわざ数学や物理を学びなおしたのは、この分野の作問ができる作家が少ないので、自分が生き残れる確率が高まると思ったからだ。効果をイメージし、目の前の課題をこなすことができるたびに「私えらいわー」などと（心の底からは思わなくていいので）大げさに口に出してみる。すると、ゆるやかにモチベーションが上がり、苦手なりに取り組みやすくなってくる。

この一連の流れを継続していくうち、自分の得意分野と学び中の苦手分野を組み合わせることも考えるようになる。歴史が得意なら、「遺跡からの出土品」×「物理の放射性炭素年代測定法」Ⅱ「古代のロマンを感じられる計算問題」、といった具合だ。学んだことが役に立ったという経験を積むと、もうちょつとやろうかなという気が湧いてくる。苦手のいくつかは、こうして強みに変わっていった。

「嫌」で「できるようになりたくない」ものは避ける

なお、あるものごとが「苦手」か「嫌」か、「できるようになりたい」か「できるようになりたくない」かは、はっきり区別した方がうまくいく。「苦手」かつ「できるようになりたい」なら迷わず克服へGOだが、「嫌」や「できるようになりたくない」ものであるのなら、別に無理する必要はない。

この分け方は、他人に特定の考え方や行動を求められたときにも有効だ。本当は「嫌」で「できるようになりたくない」ものののに、うっかり「苦手」だと捉えていると、他者が望むことから距離をとる自分をダメなやつだと思ってしまう。そうすると、自己肯定感はいなす値、人からのいわれのない攻撃にも甘んじる、という状況になりかねない。

なので、「嫌」かつ「できるようになりたくない」ものからは、下手に頑張らずダッシュで逃げるのもありだ。

所属している組織で、形骸化し誰も実効性を見出せないのに継続されている業務がある場合、その改善をしようとして邪険に扱われたならば、無理にその場に留まらず離脱を考えるのもありかもしれない。以前、私も立場上、自分が正しいと思い込んでいる人たちのいざこざに割って入らざるを得ず、かえって飛び火をくらって数年間不遇だったことがあ

る。彼らへの対応はそもそも「嫌」で「できるようになりたくない」（限られた時間はもつと生産性のあることに使いたい）ものだだったので「喧嘩は外でやって」と言ってそれ以上関わらない方法があったと、いまになって思ったりするのである。

## マリ・キュリーに学ぶ並行作業法

科学者マリ・キュリーは、ノーベル賞を受賞した初の女性である。一九〇三年には放射能の研究で物理学賞、一九一一年にはラジウムとポロニウムの発見などで化学賞と、二度の栄冠に輝いた。

そんな彼女に私が出会ったのは、小学校の図書室だった。当時はまだマリ・キュリーではなくキュリー夫人といわれることが多く、年齢ひと桁の女兒なりにちよつとモヤツとしながら彼女の伝記を開いた。その本には、極貧生活のなかパン屋から漂う匂いで飢えをしのいだ、放射線・放射能という言葉を生み出した、などと、興味深い情報が様々載っていたのだが、なかでも印象に残っているのは、彼女の勉強法だ。

彼女はある教科の勉強に疲れると別の教科に移り、それに疲れるとまた別の教科に移り

……といった要領で学んでいたという。学習で学習の気分転換をするという発想は、とても効率的に思えた。実際にやってみると想像以上に具合がよかったので、以来学校の勉強はもちろん、この仕事に就いてからもずっとそうしている。

クイズ作家という職業は、作業で作業の息抜きをしやすい。クイズは一問がさほど長くないうえ、題材がコロコロ変わるためだ。たとえば今日は調べ物をしていたのだが、「バナナ」という名前のブドウがある↓陸で暮らすカエルはおなかの皮膚から水を飲む↓日本刀で峰打ちすると実は刀が折れる」……という順で真偽を調べていき、やっていることはひたすらリサーチなのだが、かなり充実した時間を楽しむことができた。ちなみに、先ほどの調べ物の結果はどれも正だ。ただし、峰打ちの件は力の加減や方向にもよる。また、日本刀の背面側は本来「峰」でなく「棟」なので、このあたりまで説明するとなると、テーマは日本刀なのにちょっと切れ味が悪い。

やらされている感をなくす

クイズ作家でなくても、社会人は多かれ少なかれ複数の作業を行き来することになると思うが、「マリ・キュリー式作業法（勝手に命名）」にはコツがある。それは、「他人にや

らされている感」をできるだけ生じさせないことだ。

日々の作業はぶっちゃけ望んでも望まなくても発生する。積みあがる業務に受け身で対応すると、やらされている感が強くなりがちだ。そこで、その作業が「自分にとって」どんな意義があるのか、結果を得ると「自分にとって」どう楽しいのかを、あらかじめ考えるとうまくいきやすい。

ちなみに、マリがつかえひつかえ学んでいたのは、物理や数学だ。人によってはこう聞くだけで「うへえ」となるかもしれないが、彼女本人にとっては楽しかったからこそ、その学びが続いたのだろう。

ところで、小学生のころに読んだ偉人の伝記といえば、紫式部を扱ったものも印象深かった。彼女の父親は、娘の豊かすぎる秀才に「この子が男だったら」と嘆いたというが、その部分を読んだ私は、「この言葉、一〇〇〇年も生き残ってるのか!」とびっくりした。当時、知人に商才あふれる女性がいて、彼女は「この人が男だったら大社長になっていただろう」と言われていた。それが褒め言葉のニュアンスなのである。実際は、女性だったから大社長にならなかったと言われているようなものだが、これが褒め言葉って何よ・笑なお、このフレーズはいまの時点でもまだ生きている。先日年かさの人が私との会話で

口にしたもので、聞いた瞬間頭のなかをシーラカンズが泳いだ。とはいえ、この手の「生きている化石」的な言葉はそう珍しくない。イチヨウやオウムガイが地球上に長く暮らしているのと同様、「近頃の若いモンは……」というぼやきは少なくとも四〇〇〇年くらい繁栄している。

これらを「いつの世も変わらない」と愛おしく思うか、生きている化石の代表格・ゴキブリよろしくスリッパ片手に追うか。個人的には、向こうさんも生き物なので単に野外ですれ違うだけならわざわざ寄っていかないけれど、私の部屋で出るのならそのときは覚悟してちょよ、と思っている。

## 使えなくなるクイズがある

### 【問題】

- ・百獣の王・ライオンは、実は自宅で飼える。○か×か。
- ・現在日本の家庭で飼える最も大きい動物は何でしょう？

これらの問題は、テレビのいわゆるゴールデンタイム用に考えられた、老若男女が楽しめるお茶の間向けのクイズだ。前者の答えは○、後者の答えはキリンだった。ちなみに後者は比較的有名な雑学で、テレビCMにも使われていた。

ただ、この二問の答えは、二〇二〇年に変わってしまった。前者の答えは×となり、「え、飼えるの!？」という驚きが消えた。後者の答えに至ってはもはや正確な判定が難しくなったため、そもそも出題されなくなった。

これらの変化は、「動物愛護法」の改定によるものだ。ライオンやキリンは「特定動物」といって、人やその持ち物に危害を加える可能性があると考えられている。こうした生き物を飼う場合、かつては都道府県知事の許可が必要だった。つまり、裏を返せば許可をもらえば飼えた。そのため冒頭のような問題が成立していたのだが、法律の変更により、すでに飼われているものは別として、新たな飼育は動物園や研究所など特別な場所ではかできなくなった。

ちなみに、キリンが飼えなくなっても、キリンを散歩させる場合の法律は生きている。『道路交通法施行令』には「象、きりんその他大きな動物をひいている者」は「車道を行く」という定めがあるため、キリンと一緒に散歩やパレードをする場合は歩道でなく

車道を歩くことになる。

ところで、さきほど法律を改定、変更と表現したが、この言葉選びには違和感のある方もいるかもしれない。なぜより一般的な「改正」を使わなかったかといえば、それは個人的な好みの問題だ。「改正」は不備や間違いを改め直すという意味の言葉なので、変更後の仕上がりが正しい状態にあることが前提のように聞こえる。

こう感じる時点で私がひねくれているのかもしれないが、なにかのルールが変わったときに「〇〇を改正しました」という発表を聞くと、この人たちは変えた結果が誤っている可能性を考えないのだろうか、とか、自ら「正」という字を使っちゃうのね、とか、余計なことが頭に浮かぶ（やっぱりこちらがひねくれている気がする）。

このような事情から、人が使うのはまったく問題ないとして、自分の文章では「改正」という言葉を選ばないことが多い。しょうもないことだが、文字面を気にするのはクイズ作家の性<sup>さが</sup>のようなものなので（と自己「正」当化してみる）、もうしょうがないなと思っている。

答えが変わってしまった問題



閑話休題。クイズの答えが変わってしまった例としては、こんなものもある。

### 【問題】

日本で初めてラーメンを食べたのは誰でしょう？

選択肢 A…足利尊氏 B…水戸黄門 C…福沢諭吉

この問題はもともと「B…水戸黄門」こと徳川光圀が答えだったのだが、一四八八年に亀泉集証とその仲間たちが初めて……って、亀泉って誰やねん。

亀泉集証は室町時代の僧侶だ。将軍・足利義政の信任が厚かった人物で、この人が大部分を書いた『蔭涼軒日録』は、当時の政治や貿易の状況を知るための重要な史料として知られている。この史料の一四八八年の部分には、中国の本で調べた「経帯麵」という麵を作って客に出し、自分も食べたという内容が書かれている。この記述が二〇一七年に報告され、記録にある限り日本で初めてラーメンを食べた例ということになった（なっちゃった）結果、一気に二〇〇年以上歴史が更新されたのだ。

この発見が新聞、ラジオ、新横浜ラーメン博物館ホームページなどで報じられたとき、

私の頭のなかでは、「こうしてこの世界から、またひとつつつきやすいトリビアが消えた」というナレーションが流れた。右のクイズは、国民食ともいわれるラーメンを素材にしていること、歴史に詳しくない人でも聞いたことがある人物・水戸黄門が答えになることで興味をもてるクイズに仕上がっていたわけだが、その前提が崩れたら、「だから何？」と言われてしまう。

また、複数人で食べたことがはっきり記載されているのも、ちょっと苦しいところだ。答えが水戸黄門であったときも、作った料理人が少し味見したとか、実はご相伴に与かった人がいたとか、そういったことはあったかもしれないが、それが記録に残っていないから水戸黄門を答えにできていた。より慎重にするならば、問題の冒頭に「次のうち」と入ればよいことで、特に問題は発生しなかった。ところが『蔭涼軒日録』の場合、複数人で食べたことが明らかで、クイズとしては成立しなくなったのだ。

クイズ作家は、日々このような情報の更新に見舞われている。消えるトリビアもあれば新たに生まれる雑学もあるので、ときに楽しみながら、ときに残念がりながら、アップデートを繰り返している。

# クイズ作家のすごい思考法

近藤仁美

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：968 円 (10%税込)

発売日：2025 年 2 月 7 日

ISBN：978-4-7976-8152-9

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)